

村山知義の転向小説(2)

—「母の手紙」「女史」「劇場」—

尾西 康 充

(承前)

四 母の手紙

1

「母の手紙」は「新潮」第三二年一号(一九三五年一月)に発表された。この作品は、二通の往復書簡によって構成されている。一通目は、「一九三四年二月八日午後八時燈下にてしたたむ」という言葉ではじまっている。杉並区天沼一丁目一三四番地にあつた従妹の家に寄寓する服部明子が、一昨日来訪した「杉本奥様」に宛てて発信している。夫に先立たれてから苦労したことやクリスチャンであること、明子の息子敬二と「杉本奥様」の息子行雄とが「国法に触れてひとやに閉じ籠められ」ていることなどが共通している。

この書簡のなかで、各段落の冒頭は「世に二人となくお慕ひ申し上ぐる杉本奥様」、「奥様お許し下さいませ。愚かな私はいつになれば感謝のみにて暮すことが出来るやうになるので御座いませうか」などの訴えかける言葉ではじまっている。明子に

よれば「神経の病」を患っているというが、明子は「杉本奥様」に対して信頼の域を超えて依存してしまつてゐるという観がある。過度に用いられる敬体のスタイルは、敬愛というよりも押し付けがましきさを感じられる。また、同居している甥夫婦について、「未信者は如何に心やさしきものも物足らぬところあり」や「未信者の中に寄食して暮し居るは、真に敵国の中にあるやうにて、毎日苦しみのみ多く」と述べるところなどは、信仰をこえて偏執病の傾向さえうかがえる。

五四歳になる明子は四カ月前、入獄して一年半になる敬二と面会した。行雄が転向したことを「杉本奥様」から聞いて、思想を捨て、神に帰依するように説得に赴いたのであつた。明子は「神様、神様、奇蹟を現はして下さいませ」と念じながら話したが、敬二はそれを拒絶した。敬二によれば、「僕は僕が得た真理をまだ真理だと思つてゐるし、また、一生さう思つてゐるでせう」とする。そして思想を捨てることには、「もう絶対に触れないで下さい、そして僕はどんなに苦しいことがあらうと、心の中では最も幸福であることを忘れないで下さい」という。

明子と「杉本奥様」の信仰を導いたのは、今は亡き「国井師」であった。しかし「国井師」の息子もまた「同じひとやの人」になつてゐるという。明子は、「国井師」の著書『黙示録解義』を読み、キリストの再臨を信じてゐる。だが敬二は「宗教に絶対に対反対する者」なので、「もしや最後に残さるる、神様に見離されし者にあらざるや」という恐れは、「日夜私を責めさいなみ、感謝に満たされてゐるべき私が悲痛に沈む」ようになつたという。

2

二通目は、「一九三四年十一月十三日午前五時」という言葉ではじまつてゐる。前便と同じように、最初から「世に二人となくお慕ひ申し上ぐる杉本奥様」とある。行雄が保釈出獄したという知らせが「杉本奥様」からあつた。だが行雄によれば、「自分が深く宗教を研究しよう」といつたのは「ただ科学的に研究しようとの意味」で、「宗教に対する以前の考へは少しも変りしに非ず」という。明子は、それは行雄の「何かの御考へ違ひ、または云ひ間違へ」に相違ないとし、「杉本奥様」を慰めつつも、不意に「御羨ましさに耐へぬ心湧き起」こつた。「嗚呼何故神様は奥様のみに御眼をとめられながら、敬二を顧み給はず、私の祈禱を聞き給はぬのであらうか」と思うような「汚れたる心」を持ちはじめた。「神様の御摂理を人間の心で量つてはなりません」と思いつつも、「苦しみに打ち砕かれ」「恐ろしき闇に襲

はれる」のであつた。

このように書き進めてきたのだが、明子は手紙を書くうちに眠つてしまつた。病気で瀕死の状態にある敬二が夢のなかに登場した。「午前十時」に目を覚ますと再び筆を執つて、敬二の救援活動をおこなつてゐる岸本勉のところに出かけ、敬二の様子を見てくるように依頼してほしいと、「杉本奥様」に書き送るのであつた。

以上がこの小説のあらすじである。豊多摩刑務所に収監されてゐた村山は、母元子宛ての一九三〇年八月二六日書簡のなかで、つぎのように記してゐる。

僕はここで藤井武氏、内村先生の新しい価値と意義とを發見しつゝあります。その価値と意義の發見を僕は彼らの信仰へと持ち来すものではないけれども、しかし正しく彼等を知ることとは是非せねばならぬことと思つてゐます。(中略)僕はキリスト教が——殊に藤井氏のそれが——母様の「存在そのもの」であり、母様の全希望が、僕の信仰を獲ることにあることを、ハッキリ胸に置きつつ、深意を深く、読み且つ考えることを母様に約束します。僕の立場がキリスト教と反対のものであることが母様の悲しみである如く、僕がいろいろの苦しみを通して前進しようと、それは究極において、母様によるこびをではなく、恐らく最も大きな悲しみをしか、もたらし得ないであろうことを考え

るのは誠に残念に耐えぬことです。⁶⁾

右の獄中書簡は、この小説の背景となる事実を伝えている。村山は、マルクス主義に関心を持ちはじめた「一昨年以来」、母に宛てた手紙には、キリスト教信仰に関して「甚だ母様を悲しませ苦しませるようなことが沢山書いてありますが、それにも拘わらず読んでほしい」という。村山によれば、ひとたび「傾倒すると、熱烈に傾倒してしまう性格」の母は生涯を通じて、三名の人物に傾倒したという。その三名とは、叔父の守治、内村鑑三、藤井武であった。⁷⁾キリストの再臨を説く国井師の姿は、内村と藤井をあわせたイメージであろう。宗教に帰依していた母親が、息子の無事と釈放を願って、一層信仰に依存してゆく様子がこの小説からうかがえる。厳しい現実⁸⁾に直面したとき、それを乗り越えるために形而上の何ものかに救いを求めるのは、ある意味、きわめて人間的な行為である。しかしその人間性は、息子の思想とは相容れない。息子の唯物論の発想は、母親の信仰とは背馳するものであった。村山の実体験がふまえられている面が多々みられる作品であるが、母親の精神的なゆがみはよく描かれている。しかし宗教と思想の対決といったテーマが深められているとはいえない。

1 五 女史

「女史」は「文藝春秋」第一三年四号（一九三五年四月）に発表された。語り手「私」は、原稿料収入の「八分」をもらうという約束で、水町美穂女史の筆耕に雇われることになった。「私」の夫は「四年の宣告」を受けて「既に三年も獄中」にいるが、夫婦の關係は「ただお互ひを高め合ふ生活であつたし、離れてゐる今でもさうである」。下落合にある女史の「汚い家の玄関」に立ったとき、「私」は「意外の感に打たれてたぶん驚愕の色をかくすことができなかつただろう」と感じた。「外国帰りの有名な医学博士」や「有名な洋画家」との恋愛沙汰で有名になった女史のイメージ——「あの妖艶な歌の作者、男達にあのやうな情熱を燃え立たせた」——からはほど遠い、「掌ほどに小さな女」であった。

繁雄という名前の青年が訪れた翌朝、女史は「私」に向かって「ああ、私はどんなに男性の横暴に対して憎悪を抱くでせう！私の全生活は男性の封建的横暴に対する抗議だわ！」という。夕方帰ろうとする「私」を引き留めて、熱爛を呑みながら過去の話を語り出す。医学博士である一方、竹柏園門下で和歌に造詣のあつた菅野は、女史の「技巧的な情熱的な歌を許すことが出来なかつた」。その結果「私の一生の芸術的生命はあの人に絶たれた」という。他方、女史を捨て他の女性と交際をはじめ、上海に遊びにゆく船上、玄界灘で投身自殺した洋画家の柏木は、

「徹底的に私を苦しめ抜いた」。「程度の差はあれ、この二人の男の女を見る眼は封建的な眼なのだ！」というのである。

六年前、二三歳であった繁雄は、ある醤油会社の宣伝雑誌の記者として女史のもとを訪れた。すぐに二人は引かれあつたが、「稀代の怠け者」であつた彼は、すぐに記者を辞めてしまい、それ以来まったく仕事をしない。女史は献身的に尽したが、彼は四カ月ほど前から、女史の家に出入りする文学少女の河原篤子と恋愛におちいつた。篤子は、女史の紹介によつてある健康雑誌の記者になつてアパート暮らしをしていたので、繁雄はそこに入り浸るようになった。女史の家には、「金がなくなつたから来たよ」といつて半月に一度しか来なくなつたが、彼が家にいる間の女史の「うれしがりやうとやさしい心遣ひ」には、「まことに涙ぐましいもの」があつた。彼との親密な関係を繰り返して話す女史は、彼が去つた後の五、六日間は、繁雄の肉体について細かく表現するなど「誰彼をつかまえてしきりにエロがかつた話」をするのであつた。

2

ところが「或る日のこと」、七、八人の女性が女史の部屋に座つてみると、篤子が繁雄の書籍費の一〇円をもらうためにやつて来た。女史は「顔色を動かさずにその金を渡さなければならなかつた」のだが、篤子は「色艶のいい頬で、ルージュを濃く塗つた唇をニコリともさせずに一礼して」帰つていつた。この光

景を目の当たりにした来客者はみな興ざめて席を立つた。最後まで残つていた「旧い女権拡張論者で女医」の鍵山澄子と「私」は、女史から一緒に酒を呑むことを誘われる。悪酔いした女史は、二人にからむ。七、八年前に鍵山は、男性と女性の間にある「封建性」の原因は、女性に「経済的独立」が許されていないからだといつた。だが女史は原稿料収入を得て、経済的に独立するようになってもお「封建性」のくびきに拉がれている。鍵山は「あなたの罪ぢやありませんよ。あなた一人の責任ぢやありませんよ。長い間かかつて女性は奴隷にされてしまつたんですよ。何千年もかかつてなんだから、あなた一人の責任ぢやありませんよ」と同情する。しかし「黙んなさい！ 女性の面よごしだ！ 今度の議會でもわれわれは活動します！」と激昂する。部屋に戻つて壁を睨みすえ、「復讐してやる！」と繰り返しながら呑みつづける。鍵山の「巨体」は「小山が崩れるやうにどうとそこに倒れ」、驚くことに「十六七の娘のやうな泣き声」が聞こえてきたのであつた。

「あの晩以後のことは噂で聞いたことに過ぎない」。「私」は気がかりであつたのだが、他の仕事を紹介してもらい、今は「洋服屋の外交」をおこなつている。ここでも「面白い話」があるのだが、話すことを止められていくという。

男性との間でスキャンダルを繰り返した女性作家の姿は、スキャンダルによつて一躍有名になりはしたが、彼女の脳裏には男性に苦しめられたという記憶しか残つておらず、彼女の文学

性を拡げることにはならなかった。女権論者の鍵山は、経済的に独立していないから女性が自立できないと考えてきたが、女性作家は経済的に不自由な生活を送れるようになって、依然として若い男性に依存する態度を示し、精神的に自立できていない。鍵山もまた、「男性に対する復讐」を原動力として精神的に行動しているが、彼女の内面には「十六七の娘」が存在していると言われた。女性の表情やしぐさの描写には長じた一面をみせるが、このような村山の見方は、時代が持っていた限界はあるものの、女性解放運動に対して表面的な理解しか持っていないなかつたといわざるを得ないものであつた。

六 劇場

1

「劇場」は「中央公論」第五〇年五号（一九三五年五月）に掲載された。一七歳の杉森勉は、C劇団執行委員の千葉健三——千葉はプロレタリア演劇の草創時代からの有名な役者であつた——のもとを訪れた。入団面接を受けた杉森の手には、「プロレタリア科学」の今月号（一九三二年九月号）があつた。

香川県の師範学校で杉村と同級生であつた上村信雄は、杉村と同じように貧乏な自作農の子で、学費が不要である師範に入学したのだが、「或るプロレタリア文化雑誌の支局を学内に作ったために停学」になつた。そこで二人は、経済的には上村の叔父、思想的には「二人の尊敬するプロレタリア作家佐上」を

頼つて上京した。連名の手紙を何通も受け取つた佐上は、二人の「たんねんき、しつこきにむしろ呆れ返つた」ことから、上村を作家の団体に、杉森をC劇団に紹介することを承諾した。

一九三一年はプロレタリア芸術運動の急激な全般的上昇の時期」だつた。創立以来六年の苦勞の実が熟してきて、公演のたびごとに「万人近くの労働者観客」が劇場に押しかけ、毎晩のように入口には長い列ができた。同じような上昇の機運は、文学や美術、音楽、映画、写真、科学、哲学などの各分野においてもみられ、その年の暮れには「各文化部門の団体の総合的組織」ができるというところまで上り詰めた。「どこの隅へ行つても才能と精力と人手のありあまるということはなかつた」という。「田舎から出て来た二人の一七歳の少年」は、「この大きな興奮の渦の中で、誰の眼にもつかかなかつた」。杉森は、塚本主任の下に小道具係助手を務めることになつた。

「一九三一年暮から一九三二年の初め」にかけて「日本の左翼文化・演劇運動」は、「世界的な大きな転換期の波の中に投げ込まれた」。「出版とか公演とかに依るイデオロギー上だけの運動の形から、経営内に於けるその効果の定着のための大衆組織の形へ」、「運動の主体から切り離されたインテリゲンチヤ専門芸術家だけのグループから、主体の直接的指導による労働文化人の大衆的形態へ」と急変した。「すべての急激な進展がさうであるやうに」、「いろいろの面、あらゆる隅、それぞれの人において、無数の古いものとの矛盾と軋轢」が起こつた。小さな

石炭のブローカーであった上村の叔父が、上村の小説創作が不振であることや、炭価が底知らずに崩れてきたことなどを理由にして金を渡せなくなつたと申し入れてきた。落合にある事務所に泊まりこむのなら書記局の仕事させるといふ話を作家団体が持ち込んできたこともあって、月島での二人の共同生活は解散することになった。書記局に出入りするようになった上村は、運動の基本的方針を「忽ち了解するばかりでなく」、その基本的方針の演劇の方面への「具体的適用の問題にさへ、明確な判断」を加えるようになった。杉村は驚嘆して上村を見上げたが、「同じスタートに立つた二人だつたのにと自分の無力を思つて一層本にかざりつき、集会の討論に耳を傾けたが、到底及ばぬことだつた」という。

2

杉森は、劇団員のために安く炊き出してくれる消費組合の人に紹介されて、二畳間を月五円で借りることになった。静岡の刑務所に服役中の犠牲者の妻岸本しげ子と、八歳の子供が戸塚のある家の二階(三畳と二畳の間)を借りていたが、目下失業中で困っていた。その犠牲者は、杉森が幼い頃田舎にいたときに大阪で活動していた噂を知っている人であつたことや、上村と遠く隔たることが「何としても耐へられなかつた」ので、杉森は早速その二畳間を借り受けることを決め、劇団の楽屋の風呂焚きをして収入を得ることになったのである。一三歳のとき

九州で糸繰女工になつて以来の労働者であつたしげ子は現在二七歳、左の眼が白くつぶれ、栄養不良のために「土のやうな色」にやせていた。

千葉健三の妻加那子は、同じ劇団の女優であつた。少年劇団をつくる責任者となつて、劇団員の家族や知人やセツルメント関係の子どもをあわせて一二名を集め、彼らを訓練していた。加那子から誘われて杉森は少年劇団の芝居を手伝うことになつた。「大きな機械の小さな歯車の一つであることはもちろんだが、あつてもなくてもよい歯車ではないだらうかといふこと」に苦しめられていた。しかし加那子を手伝つて少年劇団にかかわっていると「最早あつてもなくてもいい歯車ではなくならうとして」いることに気づかされた。

そのような折、五月のはじめに文化団体への大弾圧があり、「多勢の人達が奪ひ去られた」。劇団からも「千葉やカンちゃんを含めて十二三人が持つて行かれた」。二、三日して上村も連行されたことが分かつた。千葉が逮捕されると加那子はすぐに地下に潜つたが、四日目に「芝の方の或る家で発見」されて連行された。組織を再建するためには、運動が順調なときよりも一層大きな力が必要であつた。それが「若い未経験の人達の肩にのしかかつてきた」。杉森も「その肩の一つ」であつた。だが労働者の組織が崩れてゆくとともに公演の注文がこなくなり、子どもを退団させる親も出て、付近の小学校は観劇を禁止した。困難におちいつた少年劇団は、活動不能の状態に追い込まれた。

今までのような文化活動が不可能になると、「新しい状勢の現実」に根ざした新しい文化活動を始めることではなく、文化活動そのものを放棄して政治的活動へとハミ込む道をたどつて行つた。

服部忠一郎は、左翼劇団の草創時代には立派な理論家で「無条件に信頼された指導者」であつた。だが三、四年前から「いつの間にかその座をすべり落ち」、「ただ熟達した俳優」になつてしまつた。最古参者でありながら「たつた一人」逮捕されなかつた服部は、それを「恥ぢ」て言い訳をしつつ、「今迄の彼を思へば全く意外な果敢さで陣頭に立つた」。しかし「果敢なよそほひで陣頭に立ち」はしたが「何の指導的な理論」が出てくることもなく、「嘗ての指導者を（今の今迄自身その道をともあれ押し進んで来たのに）烈しくこきおろし始めた」。——「彼等の誤つた指導がこのやうな頽勢を招いた、われわれの演劇は彼等の指導の故に全く芸術性を擦りへらされてしまつた、今こそわれわれは彼等の置いた鉄鎖を打ち切つて自由の芸術の野にわれわれの演劇を育てねばならぬ」というのである。そして突如として仲間を見棄てて家に閉じこもつてしまふ。

劇団では「これではならぬと思つても、明確な方針を掴み得ないままに」活動ができずに離れてゆくものがあった。「生一本の良心から歯を食ひしぼつてついでゆく者もあつたが、その人達も疑問や矛盾に苦しんでゐた」。やがて「転向」といふ現象が生じ、保釈や執行猶予で出獄するものが相次いだ。一九三四年初夏、加那子が転向して出獄、音信不通の状態にな

る。劇団の主だつた人たちも次々に出獄してきた。彼らは「消し難い烙印」を負つた自分の姿をみるだけでなく、「これ程とは思はないままで荒らされた自分達の仕事の跡」をみた。「手を取り合つてくづれられた膝を泥の中から持ち上げようとした時に、駆け寄つて突き倒し、踏みにぢらうとした者の中に、以前の同志の顔がまぢつてゐたことは殆ど信じ難い事実」であつた。服部は一年あまりの閉居の後、急に「転向者に対する十字軍士」となつて出現した。そして服部のまわりには、「困難な時期に何処かに行つてしまつてゐた連中」が不意に現れてきたのである。

上村は出獄すると、石炭のブローカーをしている叔父の紹介で、ある石炭会社に就職した。「俺は今、事業慾に燃えてゐる、石炭に関する研究で非常に忙しい」と「昂然と」語つた上村に對して、杉森は彼が「常に昂然としてゐたことを思ひ出し、不思議な性格」だと驚いた。千葉健三も出獄してきた。獄中への差し入れに礼をいうために、杉森の二疊の部屋を訪れる。千葉も加那子の連絡先を知らない。

3

ある朝、新聞を開いた杉森は、加那子の顔写真が掲載されていることに愕然とした。婦人雑誌に連載中の通俗小説の映画化に当たつての新しい宣伝方法で、有名な男優の恋人と妻を当てるといふ企画であつた。杉森は「眼のくらむやうなつかしさと一緒に、遂にここまで落ちたか、何故ここまで落ちてくれた

のかといふ絶望のやうなもの、恨みのやうなもの、惨ましきのやうなものが、枯葉のやうに彼をころがしまくつた」。この間「文化団体の中のみならず、深く尊敬し信頼してゐた先輩達が、想像もつかぬやうな姿に落ちてゆく恐ろしさを幾度も幾度も見せられた」。しかし、加那子が「本心から落ちたとは思ひ得ない」ことである。杉森は彼女の映画を觀にいった。名前を変えて三枝鉄子となつた彼女は「可成りな好評」を得ていた。

つぎの映画は「その年の暮から一九三五年の正月」にかけて、新宿と浅草の「一流館」で封切られた。アトラクションとして主役の男優と加那子が舞台でボレロを踊るといふ広告が出た。杉森は工面した金を払つてアトラクションの最初の日に出かけていった。肉感的な彼女の踊りに、「何とでもして彼女を救ひ出さねばならぬといふ考へ」と同時に、「初めて彼女に対して烈しい性欲」を感じた。いつの間にか、彼女を劇団の指導者としてではなく、一人の女性としてみるようになっていたのである。

不意に訪れた千葉から、加那子が四谷のSアパートに引越すことを知る。四、五日経つてから杉森がアパートの前までいつてみると、入り口の名札には、「乗杉加那子」という本名が記されていた。それから三日間通いつづけ、四日目の朝、思い切つて加那子の部屋を訪れてみる。杉森の口調から彼が自分を「侮蔑してゐないと信じた」らしく、昔の同志の消息を尋ねた。そして加那子は千葉と別れたいきさつを少しづつ話し出した。一斉検挙のあつた五月、千葉が検挙されると加那子は、事前に

準備していたアジトに潜つた。だが四日目に踏み込まれて連行された。アジトの場所は千葉と加那子しか知らなかつた。千葉が警察に洩らしたことになるのだが、これは「ただに仲間を裏切つただけではない。夫が妻を裏切つたこと」になるのである。二人の間の愛について「云ひやうのない疑惑」に落ちた。しかし「彼の身体が耐へられなかつたため」と考え、その「疑惑」を打ち消すことに努めていた。獄中で二年経過した頃、取り調べの際に検事から千葉が転向したことを聞かされた。「この打撃はあまりに大き過ぎた、ガラガラとすべてが崩れ落ちた」。そして自分も転向するに至つたという。

加那子によれば、かつて自分が労働者劇団の劇団員としてS市にいたとき、千葉がオルグとしてS市にやつてきた。千葉は「運動の上で或る秘密な重要な地位についてゐる」と告白した。「ハウス・キーパーの役目をするために」必要だからといつて、加那子を東京に連れてゆき、「強奪的に妻」にしたのだという。この場面には、当時の運動におけるハウス・キーパーの問題が示され、転向をおこなつた男性活動家と、彼を支えてきた女性活動家との間にみられた心理的葛藤が描かれている。

加那子がアトラクションから帰つてくると、千葉が戸口に立っていた。千葉は「恐ろしい熱で、もう一度結婚してくれと迫り、やがて文字通り膝まづいて嘆願した」。千葉が涙を流すのはじめてみた加那子は、心を動かされそうになつた。「自分はどうにでも君の云ふ通りになる、将来絶対に進歩的演劇な

ども関係しないでサラリーマンになれと云ふなら親父の関係で這入れるところもある」といい出した。それをみて、「ムラムラと彼の再度の裏切り」を思い出して「絶対的に拒絶」したという。気がつくとき夜中の二時を過ぎていたので、千葉を泊らせるほかなかった。翌日、千葉から手紙がきた。千葉によれば、実は昨夜眠ることができず、一緒に死んでしまおうと思つてストープの瓦斯の栓をひねつた。やがて呼吸が苦しくなると「突然ハツと思つて」栓を閉め、窓を開けたという。帰つてから思うと自分ながら恐ろしい、復縁を考えてほしいと記されていた。

4

加那子がブルジョア映画会社の女優になつたのは、経済的に自立するため、それまでの思想をカムフラージュするためであつたが、その他にも理由があつたという。「或る新劇団」の招待日、芝居が終わつてからぜひ話したいことがあるというので、千葉は杉森の部屋を訪れた。千葉の「率直さ、問題同志の問題として解決しようとする態度」は、杉森の胸中に「尊敬と歓喜の情」を喚起した。杉森によれば、加那子が逮捕され、陣営に打撃を与える原因は、自分にある。加那子がおちいつた敗北は、自分の敗北によるものであるのは事実だが、「ただ、それがひとへに私の敗北だけから惹き起されたものであるとは、たとへ私の感情がさうであることを望まうとも、考へられぬ」。ただ考慮しなければならぬのは、彼女が「非常に強く感情的

な女」であることだつた。警察の取り調べに際して「頑強な態度」を取りつづけたことを聞いている。しかしこのような性格の女性が「キヤタストロフ」に出会ふと激しい感情の奔走」が起さる。「自信のある容貌と肉体と芸を武器として、人氣の絶頂に立つて人々を見下してやりたい、嘗て嘲つたものを、全く別の武器によつてへいつくばらせてやりたいという感情」に押され、「可成りの積極性を以つて映画女優」になつたのである。だから「映画女優として一応成功」したら「その次にどこへ奔走するかと心配だ」という。彼女にまた「キヤタストロフ」が来たときに「よい相談相手であらうと常に用意」しているつもりだとする。千葉は帰りがけに階段を降りながら、「君たちのやうな若い、土つかずの人達が、この暗い時期をスタートにして生きている」ことに「大分はげまされている」と声をかける。「君達みたいな生れながらのマルキスト」の「新しいヤンガア・ヂエネレーション」がはじまつているというのである。しかし杉森は「偶然」であつたにせよ、「基本的誤謬がまだ犯されてゐない」ということは一つの動かし難い事実」であり、「自分は何としてみてもそれを犯すまい」と誓うのであつた。

果たして千葉の話した通り、加那子が企業家の跡取り息子と結婚するという記事が新聞に掲載される。彼女が暗示した「その他の理由」とは、結婚を意味してしたのである。だが加那子の期待とは裏腹に、その結婚は「ドラ息子」の不行状の一つではないという話も聞こえてくる。杉森が演出助手として舞台

稽古にのぞんでいると、千葉が顔をのぞかせる。「維新直前の或る山の中の宿駅の人々の扮装」で俳優たちが登場する。これは村山の年譜と照合すると、一九三四年、新協劇団の第一回公演として島崎藤村『夜明け前・第一部』を九月に脚色し、久保栄の演出によって一二月に築地小劇場で初演された頃と重なる。ちなみに村山は、この年の三月に東京控訴院で懲役二年執行猶予三年の判決を受けていた。小説の最後は、岸本しげ子の夫が非転向のまま満期出所して東京駅に到着し、妻子と再会している光景を、杉森が思い浮かべるといふ描写で終わっている。

この小説は、プロレタリア演劇運動で活躍していた村山にとって、実体験を最も反映しやすい素材で構成されている。しかし転向体験が十分に内省されて描かれているとはいえない。

千葉と加那子の愛情関係がハウス・キーパー問題や裏切りによって変化を遂げるというスキヤングラスなストーリーは、興味本位で読む人びとの関心を引いたかもしれないが、転向者の内面が深く掘り下げられてはいない。あくまで愛憎劇であって思想劇ではない。運動の敗北を時代背景にした、格好の「読み物」であつたにすぎないのである。

【注】

(6) 村山知義『演劇的自叙伝』第四卷(一九七七年三月、東京芸術座)

(二一八～二一九頁)

(7) 村山知義『演劇的自叙伝』第一卷(一九七〇年三月、東京芸術座、一六頁)